



自分の山を登る

To Be Yourself

永田円了

自分を生きたい、でもなかなか生きられない。自分の山を登りたい。でもどうやって。この数年私の頭から離れなかった問いである。自分を生きるとは、一体どういうことなのか。自分の山を登るとは？

あるとき電車のつり革につかまりながら、車中の広告に目が留まった。「英会話8週間でマスター」「留学の夢を叶えよう」「将来の夢を叶えてくれる我大学へ」「夢のマイホーム」等、学生時代も同じ広告をみて、「よし俺だって」と沸き上がるエネルギーを感じていた。今思うと懐かしい。還暦を過ぎた今、どのゴールも自分なりに到達できた。しかし、これで本当に自分の山を登ったと言えるか。

人は何かを実現すると心が高揚する。しかしそれをつかの間、また何かに挑戦し始める。どこまで行くと安心できるのだろうか。ある時ハッと気づく。そうか、幸せは山頂にはないのだ。幸せを求めて山に登ってもダメなのだ。ではどう考える。それは、幸せを、ではなく幸せに、自分のゴールに向けて進むことだったんだ、と。



競争社会のなかでは、当然効率を考える。どうやったら人より早くゴールに到着できるか。経済学より経営学のほうが幅をきかせる。文学よりハウツウものがよく売れる。人より早く山頂に着けば、周囲の評価もあり、達成感もある。しかし、これで自分の山を登ったと言えるのか。

“自分の山を登る”とは、一步一步の歩みを心から楽しむ自分になること。そのためには、人との競争の中でボロボロになった自身を引き上げ、己に言い聞かせる。「おい、何やってんだ。あり得ないような確率でこの世にお前は生まれてきたんだぞ。だから有り難いというんだ。お前のやるべきことは必ずあるはずだ。試行錯誤してその道を見つけてみよう」と。

自分の価値を何によって決めるのか



自分の価値を何をもって決めたらいいのか、これは切実な問題である。周囲の評価で決められるのか、名刺の肩書きでなのか、履歴書に書かれた学歴や過去の業績か、それとも何々賞受賞と新聞に載ったことで決めるのか。

フランスの哲学者サルトルは言った。「人は自分の中に人の目を入れると地獄を見る」と。今は亡きダイアナ妃も別居後のスピーチで言った。「人は社会が求めるような完璧な人間になろうとすると、息がつかまってしまうことを、私自身が痛感してきたことです」と。『死ぬ瞬間』の著者エリザベス・キューブラ・ロス女史も、1985年の来日時、河合隼雄氏との対談で強調した。「人は人生でやり残したことがいっぱいある。死が近づくにつれ、憤り、怒り、憎しみ、罪悪感がつのる。他人を満足させるためだけに生きてきた人は、本来の自分の人生を生きてこなかった人である」と。

<事例>

NHK「こころの時代」より、笹田信吾氏、私たちは他人の山を登っているのでは、心理学者ユング/ペルソナ（仮面）は本物の自分ではない
プロ棋士・高橋和（やまと）/私は仮面をかぶり続けていた
高島忠夫/5年ぶりうつからの回復宣言、周囲は元にもどそうとする、
西条秀樹 48歳、突然の脳梗塞/元の自分に戻れなくてもいい
美空ひばり/ひばりの仮面をかぶって、ファンに媚びを売り続けてきた
武蔵と沢庵和尚/迷え、迷え、迷わなくなった時、人は生きることをやめる
スピルバーグ監督/私は私、周囲の目に左右されない自分
エリザベス・キューブラ・ロス/河合隼雄との対談/自分を生きていない
ダイアナ妃スピーチ/これからは、自分の山を登る
なかにし礼/課外授業、もう一人の自分と向きあう



ひばりちゃん、
貴女は自分の山を登り
ましたか